



## 手間暇かけて育てるシクラメン 大切なのは、よく観察し、話かけてあげること

湯浅 久さん  
ゆあさひさし



緑の葉の間からすくっと立ち上がる色鮮やかなシクラメンの花。春の訪れまで次々と競い合うように新しい花をつけ、その気品ある美しさと豪華さは、冬の鉢花の中でも女王の風格があります。

湯浅農園では、13～14年前からシクラメン栽培に本腰を入れて取り組み始め

ました。12月初旬に出荷のピークを迎えるビニールハウスの中は、深紅やピンク、白などの美しく咲きそろったシクラメンの鉢がズラリと並びます。

例年6000鉢くらいが出荷されますが、不況のあおりを受けて贈答需要が減り、平成14年度は2000鉢程度と3分の1に落ち込みを見せました。湯浅さんはその分、ひと鉢ひと鉢に手をかけ、愛情を込めて育て上げています。

「ひと株ひと株、手がかかる贅沢な花です。それぞれに個性があって、これだけあって同じものはないですね」



10月頃からは、葉組みと呼ばれる作業が続きます。花を真ん中に咲かせるために、葉とつぼみの位置を整え、株の中心に光が当たるようにしていきます。

「よく見ると花の色だけではなく、咲き方、育ち方、葉の模様がみんな違います。よく観察して、話しかけてあげる。それが花を育てるコツです」と、わが子のように慈しむ湯浅さんの心が伝わってきます。



### お問い合わせ

湯浅農園  
市川市柏井町1-1100  
TEL・FAX 047-339-7792

種をまいてから1年以上もかけて育て上げたシクラメンの出来に、思わずニコリ。



## 機械には出来ない丁寧な仕上げ 気配りにあふれる畳職人の技

藤井畳店・藤井 孝さん＋藤井観三さん  
ふじいたかし ふじいかんぞう

市川市関ヶ島にある藤井畳店は、そう祖父の代から100年余り続く、手縫いの技術を持つ数少ない畳店といえます。4代目を引き継いだ孝さん（55歳）と叔父の観三（69歳）さんのお二人は、この道35年と55年という大ベテランです。

早朝に訪ねた仕事場では、すでに畳の張り替え作業が行われていました。畳と床のへりとのわずかな高さの違いやへこみに、ワラを引き抜いたり足したりしながら表を張り替え、後からズレてこないように縫いとめ、やっと仕上げの縁かがりに入ります。

「今の畳は軽いし、床を畳表で巻いて機械で縫うだけだから、誰でも畳屋になれるよ。だけど、機械が故障しちゃったらお仕上げだね」と孝さんは笑います。

新素材の畳床の普及とともに機械化が進み、藤井畳店も決して傍観者ではられません。しかし、一部は機械に任せながらも、手作業で仕上げる畳職人としての誇りは守り通しています。畳に足を下ろした時の感触や座り心地などを吟味しながら、さらに目測で不具合を見極め



微調整していくという一連の工程に、経験に裏打ちされた確固たる技を感じます。

「何年やっても満足できた仕事はないよ。もう少しうまく出来るはずだと、仕事を覚えれば覚えるほど完全とは思えなくなる」と話すお二人の言葉には、技を極める職人としての情熱があふれていました。



つかの間の休憩も仕事場で過ごす。

天井の不思議な一角は畳のための非常扉。「度々の水害に見舞われてきたからね、いざとなったら畳を守るために全部天井から2階に運び上げるんですよ」と観三さん。



畳表の善し悪しは、い草の長さで決まる。上質の畳表は幅が広く、麻と綿の2本の糸を使ってい草を織りあげてある。

「強く引くと糸が切れちゃうので、力加減がなかなか難しいんですよ」と孝さんは畳縫いの技を披露。肘に血がにじみ、それを超えると固いたことができる。たこができて初めて一人前の畳職人といえる。



建物は、大正12（1923）年の関東大震災で建て直し、79年を経た今もびくともしない重量感がある。